気がつけば、花の女子大生をやっている有希だった。当時は女子大生ブーム真っ盛り。映画でいえば『私をスキーに連れてって』の、そのままの世界がそこには広がっていた。

ワンレンに、似合いもしないサーファーメイク。ろくに授業に出ずに、ハンコだけもらって、ミスタードーナツで友達とだらだらお茶をする。適当にバイトをやって、朝まで遊ぶ。

もともと目的があって入った大学ではなかった。高校を卒業する直前になっても具体的な進路が決まらなかった有希は、とにかく学校に行くよりは働きながらバンドをやろうと、市内の交通会社に就職した。母と同じバスガイドを目指したまではよかったが、分厚い教則本とセクハラ運転手にへきえきして、研修期間中にやめてしまった。その後、なんとか遅れてでも入れる大学を探してすべり込んだのが、その短大だった。

はしゃいで過ごした時間の蓄積は、比例して有希を老化させた。いつもなんだか頭がすっきりしない。何かのしこりが体の中でじわじわ成長して、正常さや健康といったものを浸食していくような気がしていた。

(どうしてこんなにも疲れているんだろう)

鏡に映した自分をぼんやり眺めては、そんなことをしょっちゅう考えた。

しこりはたぶん虚しさで、育ちながら、いつしか頽廃の形を作っていったのかもしれない。今の自分を動かしているのは、バイタリティとか、生命の輝きとかとはもっともかけ離れた、弱っちい虫けらのようなエネルギーだけだ。それがわかっていながら、どうすればこの状態から脱却できるのか、まったくわからなかった。

バンドは続けていたけれど、ただやっているというだけで、未来に向かって進んでいる気はまるでしなかった。プロになりたいという思いは真剣でも、そのための知識も知恵もなく、練習していても「これはなんのため?」と、自分で自分に問いたくなることが何度もあった。

目的もなく人は努力したりはしない。バンドを組んだばかりの頃は、地元で唯一のレンタルスタジオ、サウンドパパにひんぱんに出入りして、オリジナルを作るのに必死になっていたのに、その頃にはめっきり足が遠ざかっていた。

パールピンクの口紅を塗っているときも、友達と噂話に興じているときも、酔っぱらってクラブで踊っているときも、「こんなんじゃない」という声を心のうちに聞いた。それでもどこへ進んでいいのかわからないまま、日々は過ぎていった。

秋だった。ひさしぶりにライブハウスのステージに立った後、有希は2度目の恋に落ちた。

そのバンドのボーカリストに会ったのは、それがはじめてではなかった。高校時代から顔は知っていて、言葉を交わしたことも何度かあった。だが、その頃の有希にはまだ新しい恋をする準備ができていなかった。半年以上のブランクを置いて会った彼は、鮮烈な印象を有希に与えた。それは彼にとっても同じだった。

衝撃的な恋の始まりだった。

だが、残された時間はあまりにも少なかった。

高校3年だった彼は、翌春の卒業とともにプロになるべく上京することが決まっていた。有希はといえば、音楽の世界への展望はいっさいなく、短大もまだ１年残っていた。

ふたり一緒にいられるのも、あと数々月。そう思うと、どんなわずかな時間も惜しまれて、片時も離れていられなかった。冬が来て、やがてふきのとうが芽を出す頃になると、ますますふたりは引き寄せられるように毎日をともに過ごした。

晴れた朝、真っ白な雪で躍る光のプリズムの美しさ、彼との一日が始まるうれしさ。

ふたりでいられる時間の風の匂い、モノクロームの8ミリフィルムのように見える街並。

彼の肩の高さ、見上げたときの笑顔、そろって歩くふたりの靴、ときどき触れ会う手の甲。

海岸沿いのガードレール、鷗の鳴き声、誰もいない砂浜、猫の爪に似た月。

すべてを細胞に刻みつける勢いと、すべてに勝てる確信と。

勝つために、忘れてしまわないために、時のひと粒ひと粒を慈しみ、情報として体に取り込もうとする働き。

ひとつひとつのものが香り立つように、その輪郭を際立たせる。

別れの日は必ずやってくる。しかもその日は決して遠くない。だから今、精いっぱい愛しておきたい。そんな思いがふたりを駆り立てた。

目標もないまま、なんとなく毎日を送っていた頃に比べ、確かな生の実感を伴う原色の日々は、あまりにも早く過ぎていった。

その日、ホームと列車の境目にふたりはいた。

「手紙書くね」

「うん」

「毎日、絶対に書くね」

「うん」

駅員が片手に旗を持って、そばに立った。

警笛とともに、列車のドアがゆっくり閉まる。

こんなとき、どんな顔をすればいいのだろう。考える間もなく、涙が頬をつたって、鼻を真っ赤にしていた。

深夜発の寝台列車で、彼は東京へと旅立っていった。